

団結の結果、

CP神戸 (脳性まひ)

技になったこともあり、遠征や練習を増やして得意のパス回しを強化した。「今回勝てないとう無理と思った(八田)」という意気込みで臨み、予選リーグ2試合で13得点無失点、勢いは止まらず、30分ハーフの決勝では残り10分で1点差を逆転して栄冠をつかんだ。

CPサッカーは、パリンピックの正式種目ながら、全国に10チームほどと、普及はまだまだ。2人は「目指すは2連覇。全国で競技が盛り上がるように頑張りたい」と力を込めていた。(大盛周平)

全日本選手権、悲願の初優勝



金メダル受賞を喜ぶCPサッカーの(左から)八田健司と山内直

秀選手賞では国際大会上位者や全国大会優勝者がメダルを受け、県代表表彰では第67回国民体育大会の上位入賞者がたたえられた。県障害者スポーツ表彰では1団体と4人に功労賞、2団体と62人に優秀選手賞が贈られた。

式典には受賞者のうち約500人が出席した。井戸敏三知事が「昨年の五輪イヤーに続き、今年も(全国都道府県男子)駅伝の優勝など活躍が続いている。皆さんが兵庫のスポーツの今後を担っている」と激励。受賞者を代表し、

昨夏の全国高校総体で陸上男子400m障害を制した松本岳大(加古川東高)らが壇上でメダルを受け取った。

.....NEXTに動画



受賞者を代表し、井戸敏三知事から表彰される松本岳大(中央)と信田裕子(左) 川いずれも撮影・三津山朋彦

迫力とスピード、高

姫路商高 (少林寺拳法)

輩と弾に比べられてつらかったけど、やっとここまでたどり着いた」と感慨に浸る。

前チームは中学からの競技経験者が6人おり、技術の高さが光ったが、今回のメンバー中、経験者は森本恵子主将ら3人のみ。構えや突き、蹴りなど基本動作の正確さを追求し、実力を蓄えた。さらに集大成となった全国高校大会では、持ち味の迫力とスピードを強調。投げ技や飛び受け身を見せ場とした演武で、高い評価を得た。

「悔いなく最後まで大会を楽しめた」と口をそろえるメンバーは、全員が3年生。3月の全国高校選抜大会では後輩に連覇の期待が懸かるが、磯田浩は「私たちの結果を気にせず、楽しんでほしい」と気遣った。(小林隆宏)

受賞者の足跡、喜びの声

昨夏のセーリング全日本オープンティミスト級選手権女子の部で2連覇を飾っても、田中美紗樹(B&G兵庫ジュニア海洋ク)は「悔しかった」と言う。男子を含めた総会で、首位と同点の2位に終わったからだ。世代をけん引する自覚が漂う。

小学2年から芦屋に拠点を置くクラブで腕を磨く。同級は1人で小型の艇を操る15歳以下対象の種目だ。身長1m53だが、昨年7月に出場した世界選手権で小柄な海外選手の活躍に刺激を受け、「体のせいにはできない」と技術を追求した。

翌月の全日本選手権では、70人ずつで競う12レースすべてで8位以上と安定感を発揮。風や位置取りを冷静に判断し、切れかけたロープの警戒など、艇の隅々まで気を配って隙のない走行を重ねた。

高校生になる今春からは同級を卒業して次のステージに進む。「全国高校総体で優勝し、国際大会にも挑戦したい」と夢を膨らませる。(永見将人)

全日本オープンティミスト級V

田中美紗樹 (セーリング)



金メダルを手に笑みを浮かべるセーリングの田中美紗樹

隙ない走行、世代けん引